「原爆文学研究」 総目次 (11号~20号)

第11号(二〇一二年一二月二三日)





紫色の砂漠」はレトリックではなかった

特集「北米文学における核の表象について」 報告 髙野吾朗

105

ニュークリアリズムと戦後アメリカ文化 Wichael Gorman (松永京子訳)

核をめぐるアメリカ南西部の文学―サイモン・J・オ ティーズの詩を中心に 松永京子

日系カナダ人作家ジョイ・コガワ『オバサン』におけ

る「原爆

松尾直美

131

117

107

証言

批評

期と鎌田定夫

「生活記録」から「証言」へ―

「長崎の証言の会」

創設

東村岳史

2

元編集者が残す 『日本の原爆文学』全一五巻の記録 解題

宇野田尚哉

中村

泰

140137

297

近藤ベネディクト

解題

川口隆行

163 141

山本昭宏『核エネルギー言説の戦後史 1945-1960 ―

「被爆の記憶」と「原子力の夢」』 のアクチュアリティ 西 亮太 169

越水 岡村幸官 治

島村 輝

181 179 177 175

深津謙 郎

特集

北米文学における核の表象について

関連記事リスト(一九四五~五二年) 核時代の『英語青年』―「広島」「長崎」

「原子爆弾

瀬善治

47

エッセイ

Chim ↑ Pom と《原爆の図》

『希望』復刻にいたるまで

齋藤

65

三十五年ぶりの広島再訪

授業報告—

「原爆文学」から読む

「戦後」

的覚書-

―三・一一以後の原爆文学と原発表象をめぐる理論 消尽の果ての未来あるいは襞としてのエクリチュール 寛訳のオーデン「支那のうへに夜が落ちる」の受容― 大江健三郎の核時代観とW・H・オーデン―深瀬基

高橋由貴 山

本昭宏

34 22

一九八〇年代の雑誌『宝島』と核の「語り易さ」

彙報 林京子「九日の太陽」に寄せて

奥付

第12号 (二〇一三年一二月二八日)

村上陽子

185 183 の社会的コンテクスト―1945年8月6日~1946 『ヒロシマ』というセンセーショナルなテクストと米国

年8月31日-

集者の役割を中心に~

科学と詩学が出会うところ―マリル―・アウィアクタ

ジョン・ハーシーの「ヒロシマ」形成過程の考察~編

永川とも子

82

繁沢敦子

101

松永京子

122

小特集 か―初期の長編二作品を中心に考える― カズオ・イシグロはなぜ「復興」にこだわり続けるの と原子のナラティヴ

髙野吾朗

136

ワークショップ「ヒバクシャを〈語る〉―核と植民地 ヒバクシャを〈語る〉―核と植民地主義

Journal of Genbaku Literature Vol. 12

C9495 ¥1143E

原爆文学研究12

現実感なき帰島再定住

批評

娘〉

の負い目の物語

ĺ

〈原爆文学〉からアダルトチ

ルドレン小説へ一

鹿島田真希『六〇〇〇度の愛』、

あるいは原爆体験と

篠崎美生子

2

核関連広報施設を見る―六ヶ所村・東海村訪問記

Ŧi.

味渕典嗣

岡本芳枝

岡村幸宣 川口隆行

224 222 220 215 205

ヒロシマをあらわすこと

エッセイ

朝鮮人被爆者を「語る」―韓水山

ル諸島を訪ねて

いうレッスン

「原爆/原発小説

一の修辞学

中

28 17

『原爆文学事典』構想について 『非核芸術案内』刊行のご報告

野坂昭雄 -野和典

爆者の表象小史

もうひとつの『長崎の証言』とその後―写真による被

東村岳史

69

柳

瀬善治

50

奥付 彙報

めぐる理論的覚書その2-

もの」の声―三・一一以後の原爆文学と原発表象を

「平滑空間」に浮かび上がる「いまだ生まれていない

米核実験場とされたマーシャ

竹峰誠 郎

松永京子

171

『軍艦島』の場合―

楠田剛士

第13号 (二〇一四年一二月二一日)

『はだしのゲンが見たヒロシマ』をめぐる対話

石田

優子

139

渡部朋子

渡部久仁子

楠田剛士

155





特集

特集 「戦後70年」連続ワークショップについて 「戦後70年」連続ワークショップ

「戦後70年」連続ワークショップI

原爆文学「古典」再読1―井伏鱒二『黒い雨』

奇妙な?「士気昇揚」―『黒い雨』と『重松日記』 原爆文学「古典」再読1―井伏鱒二『黒い 『黒い雨』はどのように読まれてきたか? 雨 報告 齋藤 中野 中野和典 和典

批評

『黒い雨』とベトナム戦争

中谷いずみ

179 174 160 157

「戦後70年」連続ワークショップⅡ

村上陽子 伊織 出尚哉 38 20 34 の世界の片隅で』を中心に― 原爆体験の 被爆体験を 〈書く〉―山代巴と『原爆に生きて』『こ 〈表現〉と 〈運動〉 を問うこと キアラ・コマストリ

置の試み 「原爆文献を読む会」―会報にみる活動の紹介と再定

「核」の連鎖・ 「難死」 の連鎖 -小田実『HIROSHIMA』

汚染・文化事象・川崎-

東電福島第一 的覚書その3

原発事故と「私たち」の記録

-放射能

柳

|瀬善治

65

奥付 彙報

畑中佳

恵

102

―三・一一以後の原爆文学と原発表象をめぐる理論

現代小説を題材に「核」と「内戦」

について考える

と生活史研究の接点から―

念全国平和会議」の位置づけを中心に一

「原爆と人間」をめぐる問いと答え―「証言」

運動

黒川

東村岳

史

46

を読む

今堀誠二

『原水爆時代』再読——一九五

年

「原爆記

被爆体験・生活記録・山代巴

を中心に フィルムの中の

〈半人間〉

の射程と限界

大田洋子

半

人間

論

岡村幸宣

13

原爆体験の

〈表現〉と〈運動〉

60 •

70年代を中心に

JII

П 1隆行

188

宇野田

領下NHKラジオ言説の一端

《原爆の図》―二つの映画

『原爆の図

坂口

博

2

坂井米夫『アメリカ便り』に見る原水爆と原子―占

道場親信

7沢節子

211

196

254229

第14号 (二〇一五年一二月一二日)



「戦後70年」連続ワークショップⅣ

カタストロフィと〈詩

カタストロフィ後に〈詩〉 原民喜における詩と散文―小説「永遠のみどり」へ― を書くということ

ツェランと原民喜の詩を中心に― アウシュヴィッツとヒロシマ以後の詩の変貌―パウル・

3・11に向き合った詩人たち

「戦後70年」連続ワークショップV

原爆文学「古典」再読2—佐多稲子 『樹影』

福岡千鶴子と醇次郎―鎮魂の通奏低音 原爆文学「古典」再読2—佐多稲子 『樹影』 報告

永川とも子

野坂昭雄

15 3

道| 広島・

映画『二十四時間の情事』における表象の方法

と反原発運動との出会い―丸木 泊原発、そして電気料金不

批評

1945年の創世記―ウィリアム・L・ローレンスの

長崎関連記事にみる「宣教」としての原爆報

孤独の諸相 佐多稲子 『樹影』における被爆意識

変遷 「戦後70年」連続ワークショップV

41

東村岳史

27

「長崎原爆と復興の言説」の再問題化

長崎原爆と復興の言説

長崎原爆の復興をめぐる詩歌 「浦上五番崩れ」としての原爆

篠崎美生子

新木武志

181

楠田剛士

田剛士

169 150 145

長崎の戦災復興事業と平和祈念像建設―長崎の経済界

と原爆被災者 「戦後70年」連続ワークショップⅦ

びしか

わが英詩は如何にして「核」「戦争」「原発」と切り結

古典詩と現代詩の協奏―実作者を迎えて

「戦後70年」連続ワークショップⅢ

特集「戦後70年」連続ワークショップについて2

特集「戦後70年」連続ワークショップ

夫妻とフランス、札幌、 旅する「原爆の図」

震災と戦争、

トルコと日本の間でヒクメットの詩を読む

イナン・オネル

66

原爆文学「古典」再読3―大田洋子『屍の街

髙

野吾朗

42

高橋由貴 83

野坂昭雄

74

新井高子

柿木伸之

中原 豊 111 95

松永京子

117

坂口 博 125

村上陽子

134

原爆文学「古典」再読3―大田洋子『屍の街』 報告

『屍の街』はどのように読まれてきたか? 「手記」と小説のはざま

「しびれ」と「さまよい」について-|物語」を「空隙」で語るということ―大田洋子の

「戦後70年」連続ワークショップ™

ほぐす 被爆体験記に描かれた朝鮮人被爆者の姿―一九七〇 広島から問う、「原爆文学」と「戦後70年」 「関係の非対称性」の視点から「原爆文学」を解き

「原爆」をめぐる想像力の枠組み―ベトナム戦争と 「アジア」言説を手がかりに―

年代までー

彙報 「証言」の力学―「原爆文学」の1970年代

奥付

中 中 -野和典 野

第15号 (二〇一六年八月三一日)

長野秀樹 和典 225 210 205

234

柳瀬善治

原爆文学研究15

245 批評

山

本昭宏

蘭 251 アフリカ・広島・阿部知二―ヒューマニズムと原爆

黒川伊織

と個人の生き方

被爆体験と「平和利用」―

「『だからこそ』の論理」

東村岳史

3

榮

297 283 264

特集 文学

成田龍 高

国際会議

核・原爆と表象/文学―原爆文学

の彼方へー

特集にあたって

川口隆行

33

セッション1 移動する原爆―文学 「投下する」側の「記憶」―二〇一五年・日本から

島村

輝

39

核時代の英米文学者— Hermann Hagedorn, The Bomb

that Fell on America(一九四六年)の日本語訳(一九

五〇年)について

ジェラルド・ヴィゼナーの『ヒロシマ・ブギ』にお ける原爆ナラティヴの軌跡―大田洋子と「ネイティヴ

> 齋藤 50

301

波潟

剛

かに物理学者たちは、世界を残虐と恐怖へ導いてジム・バゴット著『原子爆弾 1938~1950年―い・バゴット著『原子爆弾 1938~1950年―い	『学生科学』の位置 株 泰 勲 1960年代韓国の原子力プロパガンダにおける	六七年の論壇での議論を中心に― 山本昭宏 36「核のカサ」の下の「理想」と「現実」―一九六三~	・シェリフ	セッション3 冷戦文化と核 (永川とも子訳)	おける核イメージの変容― マイケル・ゴーマン 12核の不安から核の無関心へ―アメリカの大衆文化に	史における〈原爆〉の利用法 紅野謙介 [1年17]雲」と隔たりのある眼差し―戦後日本映画	原爆写真というメディアと〈詩〉 野坂昭雄 86 セッション2 原爆を視る	家のはざまにいる者の気想―・・・・・・・・・ラポガン・28	島々―文学者と民族運動	・サヴァイヴァンス」をめぐって― 松永京子 4
158 エッセイ イメージのネットワークを問いなおす―「元寇」とイメージのネットワークを問いなおす―「元寇」と	148 モニュメント』 福間良明著『「戦跡」の戦後史―せめぎあう遺構と	136 教皇へ』 四條知恵著『浦上の原爆の語り―永井隆からローマ	『核と日本人―ヒロシマ・ゴジラ・フク	体する―隠蔽されてきた日米共犯関係の原点』 保田優呼著『『ヒロシマ・ナガサキ』被爆神話を解	112 承』 水溜直野章子著『原爆体験と戦後日本―記憶の形成と継	101 「原子力ユートピア」の出現』 中尾麻伊香著『核の誘惑―戦前日本の科学文化と	86 村上陽子著『出来事の残響―原爆文学と沖縄文学』	介へ	堀川惠子著『原爆供養塔 忘れられた遺骨の70年』	
中 野 和 伸 会 之 史 211 207201	四 條 知 恵 197	黒川 伊織 193	髙 山智 樹 189	伊藤 韶子 184	溜 真 由 美 180	畑 中 佳 恵 175	茶園梨加 171	高橋由貴 167	小沢節子 163	永川とも子 159

第16号(二〇一七年一二月二三日)



詩

再びルイへ。」から「祭りの場」へ/「祭りの場」

か

島村

輝

77

ら「再びルイへ。」 表現と運動の軌跡―

四國五郎と辻詩の問題―シベリア収容所の民主運動か

ら広島のサークル運動へ

Ш

口隆

行

89

四國五郎と「市民が描いた原爆の絵」 被爆体験の継

承と表現をめぐって

四國五郎—

丸木美術館 『わが青春の記録』と出会って 「四國五郎展」

217

彙報

批評

林京子「黄砂」における日本人娼婦をめぐって―

第17号 (二〇一八年一二月二二日)



林京子「祭りの場」から「再びルイへ。」まで 原爆文学再読5―林京子「再びルイへ。」報告 無線長・久保山愛吉と家族に送られた手紙を読む 三〇〇〇通の手紙から見えてくるもの―第五福竜丸

市

田真理

「原爆文学」 再読5―林京子 「再びルイへ。」

村上陽子 村上陽子

65

批評

湾における「核」

言説のジレンマ

李

文 茹 雑誌『人間』と「戦後日本」との接点―八〇年代台

に着目して

音楽における原爆の表象―

原爆詩の扱いとその変遷

山 旧﨑信

子

2

能 1登原由

美

「日本人のくせに」

303

髙

野 吾 朗

167138

山 岡村幸宣 小沢節子

本捷馬

135 126 108

特集 事典』を読む 刊行記念ワークショップ『〈原爆〉を読む文化

「『〈原爆〉を読む文化事典』を読む」報告

川口隆行(編)『〈原爆〉を読む文化事典』によせて、 中 -野和典

3

資料紹介

いま原爆を問い直すことの意味 あるいはその、さらなるさきに向かうために

東

6

権

赫 琢磨

泰

14

アメリカ文学研究と環境文学批評(エコクリティシズ

の観点からのコメント

来たるべき協働作業にむけた覚え書き一三者への短い

特集 応答— ワークショップ「炭鉱と原爆の記憶― 文化運

被爆朝鮮人・遺構から考える」 「炭鉱と原爆の記憶」を考える

一九五〇年代「原爆の図展」と炭鉱文化運動

遺構を通して考える〈炭鉱〉と 炭鉱と原爆をつなぐ―雑誌『辺境』を視座に 〈原爆

特集 他者と共同性―戦後日本のスピリチュアリティ

表象—

表象—

特集 他者と共同性 -戦後日本のスピリチュアリティ

震災後の都市の変革可能性―荒俣宏『帝都物語』

か

加島正浩

79

柳

瀬善治

76

ら京極夏彦『虚実妖怪百物語』へ

二つの島 二つのカー『モスラ』のスピリチュアリティ

「その場限り」に潜む希望―

-津村記久子「サイガサ

マのウィッカーマン」

脱措定=解放されるスピリチュアリティー三・エントゼッッング

後のポスト・ベンヤミン的星座=記号配置

丸木夫妻から峠三吉に宛てた一 六通の書簡

岡

日村幸

宣

139

②濱本武 ①ジョルジュ・ムスタキ

極私的戦争詩

髙野吾

朗

173 163

野坂昭雄 野坂昭雄

156151

Ш

П

隆 行

34

伊藤詔子

20

論

一以

柳

|瀬善治

120

泉谷 瞬 103

連載企画 原爆と〈ひと〉

奥付 彙報

第 18号 (二〇一九年一二月二一日)

奥村華子

行村至聖

67 54 44 38

岡村幸宣

楠

田剛士



91 批評

木下幸太

原民喜 「鎮魂歌」 再考— 「念想」を中心に―

遠田憲成 3

第19号(二〇二〇年一二月一九日



久保田万太郎と関東大震災―俳句を中心に ワークショップ「〈震災〉と俳句」報告

東日本大震災直後、 五〇年代原爆俳句の射程

俳句は何を問題にしたかー

当

と俳句

加島正浩

176

コメンテーター覚え書

忌日季語の時間性―ワークショップ「〈震災〉

中

原

豊

190

髙

.野吾朗

202 193

詩的考察 : 今ここにある禍

批評

原民喜と「新しい人間」

論|

言語とリズムに注目し

彙報

奥付

後山剛毅

2

-野和典 15

中

村 平 41 批評

中

岡村幸宣

78

瀬善治 92

柳

大槻とも恵 111

田口ランディ「時の川」に見られる身体性へのこだわ

相川美恵子

n

長崎源之助『うそつき咲っぺ』を参照として

崎平和の母子像》

The Art of Witnessing 証言する彫刻

金城実の

《 長

の比較を中心に一

森瀧市郎研究覚書―バトラー研究と日本倫理思想と

一九五〇年代原爆の図展ポスターの発見

後に読む

「造反教師」

松元寛の

「広大紛争」小説群を五十年

教科書と「原爆文学」

-林京子

「空罐」を中心に

132

第20号(二〇二二年三月二一日)

岡正治試論―本島等長崎市長との相違点を中心に 教科書と「原爆文学」 Π -林京子 東村岳史

俳句における原爆遺構 「友よ」を中心に

水原秋櫻子の

聖廃墟

樫本由貴

2

中

野

和

典

2

2

戦後国語教科書における とその受容ー

科書をめぐって-〈原爆文学〉 中学校用教

堀本嘉子

2

森瀧市郎研究覚書その二 「中動態の哲学」を経由 特集 ワークショップ「〈震災〉と俳句」

加島正浩 本由 田祐 茰 貴 163 153 148

藤

差別の問題と正面から向き合うために図書『原爆と差 中山士朗 して原爆文学研究への架橋を試みるためのノート― 「死の影」における主体の構成 柳瀬善 五坂昭雄 治

える― 別』問題から学ぶこと―「図書館の自由」を通して考 西河·

特集 作業日誌 2011-2016』を読む 岡村幸宣『未来へ 原爆の図丸木美術館学芸員

『未来へ』の合評会

楠

田

剛

士

作業日誌 2011-2016』(新宿書房、二〇二〇年) 書評 ―岡村幸宣『未来へ 非核の未来へ言葉を渡し、 原爆の図丸木美術館学芸員 命をつなぐ手仕事の記録

福島原発事故後の文化運動 岡村幸宣『未来へ

木伸之

やり残した課題

先生

原爆の図丸木美術館学芸員作業日誌 2011-2016』 を

読む 「原爆の図」の文化運動と 「手の痕跡 水溜真由美 岡 村幸宣

小特集 「原爆文学」 再読8―大江健三郎 『ヒロシマ・

『ヒロシマ・ノート』 再読のために

楠

畄

剛士

ノート

一九六〇年代初頭の大江健三郎と広島の関係をめぐ

る一考察―『中国新聞』と『世界』に注目して

Ш

本

昭

宏

特集 反原発思想 〜 ワークショップ「一九八○年代の雑誌にみる

ワークショップ「一九八〇年代の雑誌にみる反原発思

報告と今後の課題

加島

正浩

一九八〇年代の児童文学誌にみる「反核兵器」と「反

一九八〇年代の『宝島』における反原発言説の 展

制 度 への疑義―野草社と『80年代』における中 尾

]内靖泰

特集 原爆文学研究会二〇年

福岡について―「喪」をとらえなおす 「原爆文学研究会」との出会いまで 相川美恵子 後山剛毅

二つのまなざしの向こう側 及川俊哉

広島流川教会の思い出とその秘話

2021年雑感

長崎原爆の戦後史をのこす会編 〈居心地の悪さ〉 をアップデートする 『原爆後の75年

長崎の記憶と記録をたどる』

詩 詩的考察: 『原爆文学研究』総目次(11~20号) 生き残るための妄想共有の試み

彙報

奥付

原発

髙 四畑早希

久野桜希子

ハジメ、アイリーン・スミスの仕事を中心に 加島

Ē

浩

坂口 川口 畑中佳恵 1隆行 博

浜 藤本佳弓 恵介

松永京子

長野秀樹

朗

髙 野吾

作成 茶園梨加